維新で没落した鷲子の献金郷士薄井友衛門子孫

矢島せい子氏

（市川市中山　障害者の生活と権利を守る全国協議会長）

薄井一族が献納した照願寺の鐘の音をしみじみ聴きたいというせい子さん

【薄井家とは……】

鷲子村（那珂郡美和村）の富豪。水戸藩は一時廃止した献金郷士制を文政期に復活し、薄井友衛門も二千両を献じて百五十石取りの郷士となる。砂金採取と紙問屋を主な業とし財を築いたらしい。烏山藩の台所をすべてまかなっていたのも同家という。幕末の水戸藩内抗争の際には諸生派側に立ったことから明治初年、同家の領地はすべて欠所となり、屋敷は壊され家族は四散した。当主の十六代友衛門は、弘道館から静岡へ去った最後の将軍徳川慶喜に随行し、その地で明治七年に病没。長男友衛門は父とともに静岡へ行った。他の子どもたちの行方は―。よしは野州戸奈村郷士の石井五六に嫁ぎ、謹之進は会津で戦い、さらに函館五稜郭の戦闘で戦死した。忠太郎は明確ではないが戦傷（病）死らしい。末子の武次郎は旗本海津家の養子となり、やはり五稜郭で戦っている。としは江戸の豪商加藤平八に嫁いだ。十六代友衛門の弟で中新宅と称された宗七は、明治四年六月会津に向かう途中捕まり、日光で詰腹を切らされたという。宗七の後は信之介義英が継いだが、宗七は三男の春吉を諸生派のリーダー市川三左衛門の養子にし、春吉は弘道館の戦いで死んだ。義英の子孫（三雄―雄二）が本家を継いでいる。

末えいに芸能一家

十六代友衛門の二女としは幕末のころ、江戸は本所の伊勢屋という酒屋の若旦那加藤平八に嫁いだ。ところが明治元年暮れ賊徒が屋敷に侵入し、現金を残らず奪い去ったという。この事件を契機に伊勢屋は没落した。としの長男伝太郎は、伊勢屋再興の期待に反し芸の世界に入り、のち歌舞伎の狂言作者となった。伝太郎は妹のひさ宅で祖母や母とともに暮らした。伝太郎には二男二女があり、長女が科学史を研究する矢島祐利に嫁いだせい子さんだ。あとの三人は俳優となり、沢村国太郎（加藤友一）沢村貞子（同貞＝てい＝子）、加東大介（同徳之助）と名のり、友一の子は長門裕之（加藤晃夫）津川雅彦（同雅彦）とやはり俳優となり、芸能一家と呼ばれている。ひさ宅で暮らした祖母とは、十六代友衛門の妻礼子のことで、礼子は友衛門の死後引き取られ、この家で一生を終えた。またせい子さんは、としについて「没落した伊勢屋を再興させるため、祖父平八と祖母と外しは表面離婚ということにして、としは石井姓を名のり、ひさを連れて本所から浅草へ移り別に一家を構えた。としはあまりグチをこぼさつ過去も語りませんでした。死んだのは私が五歳の時ですが、勝気で学問にも優れていたといわれていたようです。加藤に嫁入りした時の親類書は、蒔絵の手箱に九曜の星の金色が美しく、浅草馬道の家の床の間にありましたが焼失（大正大震災）してしまいました」と語った。

天狗、諸生の話など

せい子さんは東流二絃琴の師匠で身をたてた叔母ひさの養女となり、跡とりとして仕込まれたが勉学の道を選んだ。いまは日本民俗学を研究しているが、「日本子どもを守る会」副会長、そして「障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会」会長としても多忙な毎日を送っている。昨年は障全協での二十四年間の活動が認められ、日本では初めてのヘレンケラー賞を受賞した。この年、妹の沢村貞子は随筆「私の浅草」（昭和五十三年四月―九月にNHKテレビで放送された〝おていちゃん〟の原作）で日本エッセイスト賞を受賞し、内容は違うが姉妹そろっての受賞が話題となった。

としや加藤家に出入りした薄井家の関係者から聞いた〝鷲子（とりのこ）ばなし〟を、せい子さんはきのうのことのようにはっきり記憶しているという。「小判にまつわる話がたくさんあり、恐ろしい天狗の話も勇ましい諸生の戦いの話もありました。鷲子のお寺の本堂へ行く道を上がれば左側には楼（ろう）鐘があって、その鐘にはたくさんの金が鋳込んであるのでとても美しい音色で朝夕村に響いたこと。鐘には薄井家のいわれが書いてあることなど、毎日おとぎ話のように聞きました」と楽しそうに語った。友衛門の一族が願主となって献納したという照願寺の鐘は、第二次大戦中の昭和十七年九月、政府の命で強制供出させられ日立鉱山で溶かされてしまい、鷲子の人々は鐘のない朽ちかけた鐘楼をみては美しい音色を懐かしんでいた。そこで薄井一族の薄井一美さん、吉野昌雄さん

や現在本家を継いでいる薄井雄二さんらは梵鐘（ぼんしょう）復興を計画し、せい子さんもこれに加わり、さる四十七年九月十日に落慶法要と鐘つきぞめ式が行われた。三十年ぶりに山村に響き渡った鐘の音は、きっと感動的だったに違いないが、せい子さんは「それが古いつながりの人たちとのあいさつや、集まった人のざわめきでしみじみと聴くことができませんでした。そのうちもう一度行って心ゆくまで聴きたいものです」と残念そう。

「しどみさん」は誰

梵鐘再現の過程で、薄井一族の人々から話を聞く機会を得たせい子さんは、雄二さんの話に衝撃を受けた。「中野の高徳寺に埋まっている十六代友衛門が御維新の時の友衛門だとすると、私の父（三雄）が世話をしたという友衛門は一体、どこのだれだったのだろう」と、雄二さんは真剣な表情で語りかけたというのだ。雄二さんのいう友衛門とは、明治十八年に雄二さん宅で死去した通称「しどみさん」なる人物。雄二さんの父三雄は、薄井家再興のため「しどみさん」の養子となって、「しどみさん」夫妻を一生養ったと雄二さんに言い残したという。せい子さんは「しどみさん」について祖母としや父母から何も聞いていなかっただけに、もう一人の友衛門がだれなのか見当もつかなかったという。

放浪の果てに…

水府系纂によると十六代友衛門（昌脩）の長男は友衛門（昌殷）といい、元治元年八月、天狗党が城下に乱入するとこれを追って馬頭村（栃木県那須郡馬頭町）まで進み、引き返す途中、父が役を辞したので後を継ぎ二百五十石を賜わる。また日光御宮社家、古橋仲某の妹をめとり、一子友太郎がいたとある。

この昌殷がもう一人の友衛門、つまり「しどみさん」ではないかとせい子さんは推理した。それは一美さんが所有する文書のなかに昌殷にかかわるらしい数通の文書を見つけたからだ。そこには昌殷が金井八郎という名を使い、さらに増山家の養子となり、やがて増山昌殷と称したことや、昌殷が信之介に自訴の形で籍をつくるのを頼んだ事件などが記されてあった。「昌殷は本家の後継者として生きのびるため友衛門の名を隠したのでしょう。そして反対派から身を守ることが困難な維新の混乱期を切りぬけたのでしょう」。雄二さん宅でひっそりと息をひきとった「しどみさん」が、どこから、いつ、なぜ雄二さん宅に身を寄せたのかは依然ナゾのままだ。しかし十七代友衛門なら、放浪の果て故郷の村に戻っても決して不思議はない。